

◆ 新収蔵資料紹介(令和5年度7月)展示解説シート ◆

えが つく かな
描き、創り、奏でる ～マルチアーティスト・古川潤二～

ふるかわじゅんじ

会期:令和5年7月4日(火)～30日(火)

久留米市立六ツ門図書館展示コーナー

古川家資料は、通外町出身の洋画家・藍胎漆器の制作技術者で、音楽家としても活躍した古川潤二(1890～1950)ゆかりの資料群です。これまで、平成24年度(第1次)、同26年度(第2次)、同27年度(第3次)の3回にわたって寄贈を受けており、令和5年4月10日付で、第4次として漆絵の寄贈を受けました。

今回展示するのは、その漆絵をはじめ、潤二が手がけた漆工品と、彼が指揮を執った「共鳴音楽会」の演奏風景に関する資料です。また、複数の分野における潤二の事績を年表でも紹介します。

●年賀状(共鳴音楽会) 昭和初期

★前期(7月4～17日)展示 …第3次資料

共鳴音楽会は、西洋音楽の研究・普及を図るため、古川潤二等の首唱によって大正4年(1915)に組織された合奏団です。このはがきは、本文中にあるとおり「創立十六年」を迎える年のものです。久留米市内外で精力的に演奏を行っていた同会は、「本年は當市に公會堂も出来ました」とし、のちの活動への意欲を記しています。

●写真(共鳴音楽会演奏風景) 昭和戦前期

★後期(7月18～30日)展示 …第3次資料

共鳴音楽会において、潤二は指揮者を務めました。同会は、定期演奏会や他団体との合同演奏会のほかに、慈善事業としての公演も行いました。大正12年(1923)には、関東大震災の罹災者支援のための慈善音楽会を開催しています。

●山景 大正4年(1915)…第4次資料

色漆(精製した漆に顔料を混ぜたもの)で描かれた板絵です。画題は耳納連山と伝わります。漆の塗り方や明度を変えることで、色調や絵肌の質感に幅を持たせています。山肌の描写は、盛り上げ技法によって立体感を出しています。一方空の描写は、刷毛目が目立たないよう平面的に塗られており、画面内で表現の対比が見られます。



●^{くろうるしめりはなえだもんこうしもん か き}黒漆塗花枝文格子文花器 …第3次資料

4面すべてに、小花と波線型の枝、格子文があしらわれています。格子文は小花の大きさになじむよう小柄で表されています。また、枝の周囲に配置されているため、葉のようにも見えます。小花や格子文よりも高く盛り上げられた枝部分は、波形の^{いししょう}意匠も相まって、黒漆の均一な質感のなかに一定のリズムを生み出しています。



●^{ひまわりえいりふたつきぼこ}向日葵絵入蓋付箱 …第3次資料

蓋部分に、色漆で向日葵を描いた箱です。漆工品の下地である漆の層は、均一に塗り重ねて平滑な面に仕上げる場合が多いですが、本作の蓋は、色漆を油絵の具のように使うことで凹凸のある面に仕上げています。花びらには黄色と朱、葉には緑と黄色でグラデーションがつけられ、奥行きが感じられる色調となっています。



古川潤二 関係年表			
和暦	西暦	年齢	内容
明治23	1890	0	久留米市 ^{とおりほかまち} 通外町に生まれる
明治41	1908	18	銀行に入行
大正2	1913	23	武田弥一郎・松本豊太・東原経治・大野米次郎らと共に「来目洋画会」を結成
大正3	1914	24	第3回二科美術展に入選
大正4	1915	25	3月、野口常次・松田豊・太田寛と共に合唱団「共鳴音楽会」を結成、指揮者となる
大正5	1916	26	第3回洋画展覧会(於久留米商業会議所)に油絵6点を出品
大正6	1917	27	共鳴音楽会、久留米高等女学校講堂にて第1回演奏会を開催
大正10	1921	31	共鳴音楽会、新日本音楽大演奏会にて演奏
大正11	1922	32	3月、来目洋画会、商工会議所で大野米次郎遺作品展覧会開催 6月、来目洋画会、規約変更し会名を「来目会」に改める
大正12	1923	33	4月22日、共鳴音楽会、佐世保海軍軍楽隊と合同演奏会を行う 9月15日、共鳴音楽会、関東大震災の罹災者支援のため慈善音楽会を開催
昭和3	1928	38	来目会、東京支部を創設 赤松社に転職し、籃胎漆器部工場長を勤める
			共鳴音楽会、支那派遣軍 ^{いもんきん} 慰問金募集のため慈善音楽会を開催
昭和25	1950	60	2月9日没